

浄土

1987-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年四月二十五日印刷 昭和六十二年五月一日発行
第五十三卷 五月号



春



五月の秀句

あきらかに雀吹かるゝ若葉かな

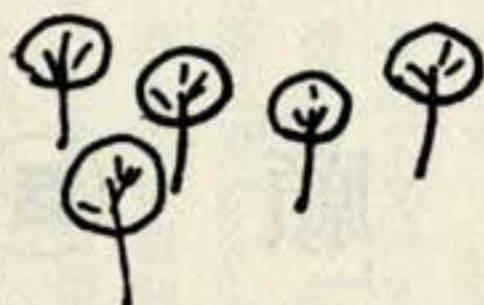
原 石鼎

新緑や暁色到る雨の中

日野 草城

ひとりゆく新樹の夜道砥の如し

中村 汀女



極楽国土には、七重の欄楯、七重
の羅網ある七重の行樹あり。

——『阿弥陀経』

目 次

法 話

「願」の一字に徹する 遠 田 弘 俊.....(2)

<連載法話>③

仏が見えてくる.....大 室 了 皓.....(7)

にここ法話

ミーちゃんブータンに行く.....長谷川 岱 潤.....(12)

=江戸物語=(4)

火事は江戸の華.....細 田 隆 善.....(17)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <2>

海と山の狭間で

——金をかけない小さな旅——

.....木 下 隆 一 ... (28)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第35回

歴史の空洞

.....寺 内 大 吉.....(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「大山蓮華」 松浦春子画

(法)

(話)

「願」の一字に徹する



とう だ こう しゅん
遠 田 弘 俊

(東京・文京区慈眼院住職)

今更に申すまでもなく、私達浄土の教えを信ずる者は、宗祖法然上人のみ教えに依って活き、上人は「われ

浄土宗を立つるの心は、凡夫の報土に生れんことを示さんが為なり」と仰せられています。而も上人は、「我れ偏えに善導一師に依る」とまで徹底して善導大師に帰依遊ばしていられます。今年にあたかも、鎮西上人、源智上人、良忠上人の御三方の御遠忌に相当致して、宗内挙げて報恩の赤誠を捧げています。此の時、私達は深く宗

祖の御教えを反省して、我が心の奥深く念佛に徹したい者であります。

ここで善導大師の御教えと「願」の一字に総べてが帰すると思うわけであります。大師の御法話として、私達が常にお誦み上げている発願文について述べるとすれば「願くは弟子等、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸々の苦痛なく、身心快樂にして、禅定に入るが如く、聖衆現前し給ひ、佛の本願、

に乗じて、阿弥陀仏国に、上品往生せしめ給へ、彼の国に到りおわつて、六神通を得て、十方界に入つて、苦の衆生を救摂せん、虚空法界も尽きんや、我が願も亦かくの如くならん、発願し終んぬ、至心に阿弥陀仏に帰命し奉る」——この一文の中に願の字が四度も出て参ります。第一の願は、吾等弥陀を信仰する者の願いを込めて、自らの心を被正するの一字であり、次の一字は、阿弥陀如来の本地法身法蔵菩薩の願であり、第三の願は、大師自身心に誓ひ給うた願であり、第四の願は、自ら現に今各々が発起した心の根底に在つて、最後臨終まで持続し得る願でありましょう。

大師の御教えは「願」の教えと申しましたが、私達衆生は常に何かを求めて己まぬものがあります。朝眼が醒めると同時に「願」を持つ。第一が食を求める。食は五体を保持する為のものであつて、命あるところに総べての働きが生ずる。当然のことながら、その願が、本来具備するものとして深く意に介しないものであります。然しこの命が私というものの根源であり、命のあるところにこれを保持しようとする本能のあるは当然であります。その本能の上に働く心、私達凡夫の「願」は何を求

めるものでありましょう。

この命の尊さは、人間としての尊さを保つことに於いて尊いことであり、この世に人として生れたことに対する真の目的とは何かということに気づくことに帰することでありましょう。

而もその人として生れた一個の私が、考えてみれば、まことに不思議な存在であります。昔の哲学者が「我れ思う故に我あり」と言つたと申します。それならば我れ思わざれば我れ無きか、等と皮肉なこともないでしょうが、私今ここにかく生きてあることは、何にも代え難い存在でありましょう。然し私は、単に命あるが故に尊しと言うならば、余りにも無意義なことではなからうか。ここに自分というものの存在が「思う」と言うことに依つて初めて判然と姿を現はすことでありましょう。往昔、法蔵菩薩が五劫という永い間の思惟をなされたと説かれていますが、此の「思う」ということのいかに大切かというところに今更に思いを致すことであります。

先刻申している浄土の教えを信奉すると申し、この「願」の置き処こそ「我れ思う故に我有り」との銘言に通ずるのではないでしうか。

偕而話を戻して、善導大師の御言葉には、到るところに「願」の一字が冠せられて、発願文は勿論、往生礼讃に至っては、全文「願」によって結ばれています。言うまでもなく、浄土の教えは「既離穢土、欣求浄土」の語に尽きるのであります。この語こそ、「願」の一字に包含されることであります。私達は平素何気なく「往生」の二字を口に致しますが、その真の意義を知っての上の何とか否かは非常に疑問とするのであります。

往生とは死である、と思われているようですが、全くその意が得られていない。これは永い歴史に於ける過誤であり、これを説き来った説教者の過ちではなかっただろうか。今さらこれを是正すると申しても、日常化した言葉のイメージを変えることは出来ないでありましょう。それはそれ乍らに容認するとして、私達はせめて自らの信条として、これを正しく受けとめて行くべきでありましょう。

発願文に帰って、この私が静かに仏前に坐して、弥陀の慈光に接した時、第一に深く反省せざるを得ないので。弥陀様よ、今日あって明日なきこの身、無量無限の大生命の前に、將に五体の滅せんとするの時、大いな

る「願」を以て迎えたい。即ち命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸々の苦痛なく、身心快樂にして、禪定に入るが如く、まことに静寂そのものでありましょう。誰もがこの事を願わずにはいられません。ここに私は難中の難を感じるわけです。それは何か、大師の次の言葉を追想するからであります。「佛の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめ給へ」と申されています。私は常にこの処まで参りますと、はたと往き止まるを得ないのです。私達の死の縁は無量であり、何時いかなる処で命終るかは、測り知ることが出来ないであります。

現代はまさに、生命の危険の坩の中に曝されていると言っても過言ではないでしょう。而もその臨終に対しての思いは、容易に安心してはいられない。

宗祖上人も常に「死の縁は無量にして、食事をし乍ら、むせて死ぬこともあり、南無阿弥陀仏と囁んで南無阿弥陀仏とのみ込みなさい」。又寝乍らにして命終ることもあるでしょう。「阿弥陀仏と十声称えてまどろむ、永き眠りになりもこそすれ」とも仰せられているのです。かくして思いを致せば、善導大師の御言葉の常に臨終正

念を確立することは、難中の難ではないでしょうか。経の中にも「易往而無人」と仰せられ、宗祖は又「往生は世に易けれど皆人の誠の心無くてこそせね」ともいわれます。

ここまで語って参りますと、「願」の一字は、あくまでも「願」であって、そのものではないということでありましょう。

私達は人としてこの世に生を享けて、やがて果てなければならぬ命であることは論ずるまでもないことです。が、その人生をどう生きて行くかと言うことが、永い人間生活の課題となつて、宗教となり、哲学となり、人倫となつて、今日までの文化を形造つて来たことでありましょう。「分け登る麓の道は変れども、同じ高嶺の月を眺めむ」であります。ここにも「願」の一字が生きています。

願望は人に与えられた最大の贈り物であり、願望あつてこそ人間と言えるであらう。その人間の願望の凝縮こそ、久遠の昔世自在王如来の御前で立て給うた法蔵菩薩の誓願ではなかったかと思ひます。

それは単に人間の慾界に沈んでいるもののドロドロし

た願望ではなく、一掬い一掬いの清水の如く、単なる蒸溜水ではなく、飲んで血となり、肉となる、甘露の水としての願を成就せられ、我等凡夫をして、「仏」たらしめようとの廣大なる「願」であり、而も今も仏として浄土に在します。かくして私達はその佛の願に順応して、その御心に即するならば、疑いなく往生が出来ると確信しなければならぬことでありましょう。

再び発願文を省みます時、佛の本願に乗じてとの仰せは、私達の無始より堅持して来た仏種が、煩惱の雲に覆い包まれて、本来の光を失つて、闇より闇へと迷妄の旅路にあったものが、「一念發起、道心慚く開発、如来の本願に引接の機を得て、往生の素懷を遂げさせ給へ」と「願」を立てるのです。

かくて、衆生本来の「願」は即ち如来の「願」に合致して、往生間違ひなしとなることでありましょう。

大師はあくまでも私達の「願」を基礎に置かれて、衆生の願は即如来の願に合致しなければ往生の果を得られないとの仰せと承るわけです。無量寿經の四十八の願は一々総べてが衆生の為のものです。ありますが、如来は如来の立場に於いて立てられているのではなくて、総べてが

私達の立場に立って誓われているのであります。

衆生仏を念ずれば、佛も衆生を念じ給うと申されています。特に念仏往生の「願」は、これを「応声即現」と申して声に応じて来現なさるとは、私達の往生したいとの「願」がなければ、如来の来迎引接の「願」が成就なさらない訳です。宗祖上人の「月影の到らぬ里はなけ

れども眺むる人の心にぞすむ」の御歌を拝しても、衆生の願は信となって往生の果を得ることとなるのであります。

「称うれば我れも佛も無かりけり南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」願共諸衆生、往生安楽国、願以此功德、平等施一切、同発菩提心、往生安楽国。 同声十念 合掌

◎『浄土』表紙版画販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、松浦春子先生の清楚な作品を昨年とは色調を変えて頂戴しております。今回も松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

連

載

法

話

<3>

仏が見えてくる



日本語の「愛しています」は英語では「アイラブユウ」と訳されますが、少しニュアンスが違っている。

私たち日本人は、とかくすると、軽い気持ちで「愛してるよ」ということもありうるが、彼等は固く心の底から、いわば神に誓って、

おおむろりょうこう
大室了皓

(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

愛しているのだと思ったときにはじめて「アイラブユウ」という、だからその言葉を語られると深刻に受け取めるのだという。

それほど重みのある言葉なのである。そしてもし相手がその言葉を受入れたならば、そこで二人は結ばれる。

わずか三十二歳になる夫をなくして、悲嘆に暮れている人がいた。幼い二人の子供が亡き父親の写真を見上げながら、

「パパ、パパー」

という姿に、周りの大人たちは涙を流していた。

それから二週間ほどして、いくらか落ち着いていたところで、私は彼女に言った。

あなたを慰める適当な言葉は、今の私には見つからないけれども、これだけはしっかり聞いてもらいたい。

仏はあなたのような悲しみのどん底にいる人にこそ最も心を寄せておられるのです。それこそ昼も夜もあなたのことに関心を砕いておられるのです。

このことを解っていたいただきたいのです。そして固く信じていたいただきたいのです。

信じる心がなければこの世は生きていかれません。親子が暮らすこともできません。家

人の手料理も恐くて食べられないでしょう。スーパーで食料品を買うこともできないでしょう。美容院にだって行かれませんか。

人を相手にすることさえ「信」がなければやっていかれません。いつときだって過せません。まして仏さまに相手になってもらおうとするからにはなおさらです。

仏さまに守って戴いて苦難を乗り越えようとなさるからには、あなたを思って、涙を流しておられる仏を固く信じることです。信じれば必ず仏は大きな慈悲であなたを助け、やがて幸せになるようにしてください。

「アイラブユウ」——私はあなたを愛します——という言葉が相手の心を動かして、二人を結びつけるのです。

仏さまとご縁ができて、固く結ばれるためにもまた「信」の言葉が大事なのです。

その信の言葉、つまり、私はあなたを信じます。という言葉は何かというと、それは「お念仏」です。「南無阿弥陀仏」という言葉

なのです。

「アイラブユウ」が相手に通じるものであるように、お念仏は仏に通じる尊い言葉なのです。

もし、あなたが「南無阿弥陀仏」と称えるならば、仏はあなたに振り向いて、

「私を信じてくれるのか、よしそれでは守ってあげよう」

と、救いの手を伸ばしてくださいます。だからといって、すぐにお金を恵んでくださったり、いまの悲しみを取り除くような喜びを、すぐに与えて下さることを望むようなはしたない考えをもってはなりません。

一本の虫歯を治療するにも何回も歯医者さんへ通うでしょう。

まして人生の一大事を解決しようとするのですから、一度や二度の念仏でこと足りるものではありません。

仕事の合間に称えるのではなく、お念仏を生活の軸として明け暮れ過ごす。解り易くい

えば、仕事をしながら称えるのではなく、念仏を称えながら仕事をするように、これからの生活を切り替えることなのです。

そうしているうちに、少しずつ少しずつ仏さまとのご縁が深まっていくのです。

これは人生の修行と考えてください。

そのうちに心の眼が開いてきて、仏さまに守られているのだということが、心底から解ってきます。

法然上人は、

「阿弥陀仏はおん目を、みめぐらして、わが名を称うる人やあるとご覧じ、おん耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜、昼きこしめさるるなり。

されば一称も一念も、阿弥陀仏にしらせまいらせずということなし」(「示或人詞」)

と、説いておられます。

どうぞ、いまお話したことを心の底にしっかりと収めて、悲しみを乗り越えて生きてください。

彼女は何度も頷きながら聞いていたが、目には見えない仏が、心の眼で見えるようになってもらえたら、と願って別れた。

命日にはお参りにくるだろう。その時どんな顔でくるだろうか、私の話が解って来てくれるだろうか。この年になっても、人を導く力不足を反省しながら、彼女との再会が待ちどおしく思われるのである。

大本山増上寺の四月の「今月のことば」として、三門に掲げた。

万朶の桜は

眼に見えるが

花を咲かせるいのちは

見えない

仏像は見えても

仏は見えない

その見えないものが

見えるようになりたい

年と共に、見えないものが見えるようになってきて、人生において何が大切なものなのか解るようになってくる。

臨死の床に伏せている人に、仏のことを説いたら、

「もっと早く知っていたら、私の人生は変わっていただろうに、それが悔しい」といって嘆いたという。

人生には欠かせない大切なもの、いうところの見えないものがたくさんあるが、その中で最も大事なものはなんだろうか。

それは、あえていうまでもなく、人間以上のもの、仏である。

それが見えるようになれば、日々を正しく、不運にもめげず、幸せに生きることができよう。

どすん、と音がして、「イタイヨウ」と、子供の泣き声がした。

「どうしたの」ママが振り向いた。おでこをゴツンとしたらしい。

「罰があたったのよ。何かしら。そうだ、僕今朝、ののさまにナムナムしなかったでしよう」

「忘れちゃったんだもん」

「やっぱりそれよ。こわいんだから、これからちゃんとしなさい」

「わかったよ、ゴメンナサイ」

次男の幼稚園児が、泣いて帰ってきた。足を引きずっている。

「どうしたのよ」ママは忙しい。

「しんちゃんが、突きとぼしたの」

膝小僧に血が滲んでいる。

「大丈夫、たいしたことないわよ。男はメソメソ泣くもんじゃないの。だけど、何の罰かしら」

「ボク、何もしてないよ」

「そうかしら、よく思い出してみたら」

「ナンかしたかなあ」

「そうだ、お昼にアキちゃんを泣かしたでしよう」

「ウン、だってアキが僕のおもちゃをとったんだもん」

「でも、アキちゃんはまだ赤ちゃんでしょう。その罰だわ。気をつけないと、いまに大きなマトメ罰にあたるわよ」

「オツカネエノ」

幼い子供には、罰とは何か、解っているはずがない。けれどもパパよりも、先生よりもずっと偉いものが、目には見えないが、どこかにいて、いつもボクたちを見ているということ、肌で感じとっているのであろう。

このような躰のもとで、長年にわたって育てられたならば、次第に仏というものが眼に見えるようになるだろう。

そして、たった一度しかない人生を、苦難にも負けずに、逞しく、生き抜くことができるようになってくれるであらう。

(つづく)

に「に」法話

ミーちゃんブータンに行く



学校から帰ってくるなり、ミーちゃんは珍しく机の前に座って黙々と宿題を始めました。今日は見たいテレビがあるので今のうちに宿題を終らせてしまおうと思ったのです。

しばらくしてミーちゃんの宿題ももう少しというときでした。

「ミーちゃん、ちょっとお使いに行ってくれない」
お母さんが台所から忙しそうに言いました。

はせがわ たい じゅん
長谷川 岱 潤
(東京・品川区戒法寺住職)

「もう少しで終るのよ、後にしてくれない」

ミーちゃんがかつたるそうに答えました。

「じゃあいいわ、お母さんが行くわ」

少し怒ったような声がして、ドアを閉める音がしました。

ミーちゃんはもう落ち着きませんでした。お母さんはよっぽど急いでいたのに違いありません。もう宿題も手につかなくなっていました。

「何であんな言い方しちゃったんだろう」

ミーちゃんは、台所や、お母さんの部屋に行ってみたりうろろ歩き回っていました。すると、鏡台の前に投げ出されたままの週刊誌に目が止まりました。何気なくページをめくっていると、弓を弾いた浩宮様の写真がありました。下にブータンと書いてあります。

「ブータンって国の名前みたいだけど、何処にあるんだろう」

ミーちゃんはとっても興味をもちました。そして興味をもつと何かしないではいられないたちです。ミーちゃんはすぐに自分の部屋に帰ると、地球儀を回してブータンを捜し始めました。一生懸命何回も回しながら探した

のにブータンは出てきません。

「ブータンって本当に国かしら、お父さんに聞いてみよう」

さっきの週刊誌を持つと、お父さんのところに聞きに行きました。

「お父さん、ちょっとお邪魔していい」

「ミーちゃんかい、いいよ入っておいで」

お父さんは何やら書き物をしていたようでしたが、ペンをすぐに置いて、ミーちゃんの方に座り直しました。

「お父さん、この弓を弾いている写真のところに書いてあるブータンっていうの、国の名前だよね」

「ああ、そうだよ、この間の浩宮様の写真だね」

「ねえ、この国何処にあるの、さっきから捜しているのにちっともみつからないのよ、もう頭きちゃうわ」

「小さな国だからね、ミーちゃんにはみつからないかもしれないね、それじゃミーちゃんの部屋に行うか」

お父さんは仕事をそのままにして、ミーちゃんの部屋に行きました。そして、地球儀を回しながら、ミーちゃんに言いました。

「ほら、インドの東に、バングラディッシュという国があ

るでしょう。その上のところに少しインドがはみ出しているでしょ、その上ほとんど焦げ茶で少しだけ茶色の国、ここがブータンだよ」

「あ、ほんとだ、ブータンって書いてある。まっ茶色じゃない、山ばっかなんだね。ヒマラヤ山脈ってあのチョモランマがあるところでしょ、すごい山だろうね」

それからお父さんは、ブータンの人々の生活ぶりを、日本人で二十三年間もブータンで暮している西岡先生の本を見ながら、詳しく話してくれました。ブータンの人達の顔が私たち日本人にとってもよく似ていることや、服装も男の人はどてらみたいなゴーというものを着て、女の人はキラというものを着ているなど、細かいことまで教えてくれました。

ミーちゃんはブータンがとっても好きになりました。そしてブータンに行きたくなってしまいました。

その晩ミーちゃんは、西岡先生の本を枕元に置いたまま眠ってしまいました。

ミーちゃんがふと目を開けると、山小屋風のホテルに泊まっていました。驚いたミーちゃんは、窓のところに

飛んで行きました。

「わあ、すごい山だ。それにこの田園風景はどっかで見たことあるみたい」ミーちゃんはしばらく考えました。

そして大声をあげました。「ここはブータンだ」三階建の民家、遠くに見えるゾンというお寺の建物。まさしくブータンです。大喜びでミーちゃんはすぐ部屋を出ました。

ミーちゃんが山道を下っていくと、後ろから真っ黒のむくむくした毛の犬がついてきました。「これがブータン犬だな」ミーちゃんがそう思って振り向き手を差し伸べると、犬は喜んで走り奇ってきました。「ブータンの犬はとっても無邪気で、人を恐れることを知らないみたいだわ」そう思って回りをみると、牛や、豚や、鶏がのんびり歩いていました。そしてどの動物も目が穏やかで優しい目をしていました。「ブータンって、人間と動物が本当に仲良く暮している国なんだわ」

ミーちゃんは益々ブータンが好きになってしまいました。

山を降りて田んぼの中を歩いて行くと、お店が何軒か並んでいる商店街に出ました。ホテルと書いてある建物

を覗くと、そこは食堂になっていた、何人かの人がかレ
ーみたいなものを食べていました。その中に一人ラーメ
ンを食べている人がいました。よく見るとお父さんで
す。ミーちゃんはうれしくなって叫びました。

「お父さんじゃない、何をしてるの」

「ミーちゃんか、ちょうど良かった。これからお友達
の家に行くから一緒に行かないか、その家には、ミーち
ゃんぐらいの女の子もいるからお友達になれると思う
よ」

「行く行く、お願い連れてって」

ミーちゃんのお父さんは農業をしているドルジさん
の家に行くことになりました。川にそって一本道をしば
らく歩いてから、細い路地に入って行くと、牛とか豚と
か鶏が遊んでいる囲いがあり、そこをすぎるとドルジさ
んの家に着きました。

ブータンの農家は、一階が家畜小屋、二階が住まい、
三階が取れた作物を干すところと様式が決まっていま
す。ドルジさんの家もそのとおりになっていて、ミーち
ゃんたちも細い急な階段を昇って家に入りました。

「クズサンポーラ」（こんにちわ）

お父さんはドルジさんに挨拶しミーちゃんのことを紹
介してくれました。するとドルジさんも奥から女の子を
連れてきて紹介してくれました。女の子の名前はティン
レーで十二才だと教えてくれました。お父さんたちの御
用が済むまでミーちゃんとティンレーは下に降りること
にしました。ティンレーはミーちゃんの手を引っ張って
豚小屋に案内してくれました。子豚が三匹本当にかわい
くて思わず抱き締めてしまいました。しばらく子豚たち
と遊んでいたら、上からお父さんの呼ぶ声がしました。

「はい、今いくわ」と返事をして気がつく、ミーち
ゃんの大事な胸のブローチがありません。一生懸命回り
を探してもみつかりません。ティンレーも慌てて探して
くれるのですがそれでもみつからないので、ミーちゃん
はもういいと手を降って上にあがることにしました。

二人で上がって行くと、ティンレーのお母さんが塩バ
ター茶を入れてくれました。お父さんたちも御用が済ん
だ様子で、みんなで輪になって座りました。

「ミーちゃん、ティンレーとは仲良しになれたかい」

「うん、とっても。でもね言葉が通じないから困っちゃ
う」

「ブータンはゾンカ語っていう言葉が国語なんだよ、でもティンレーは学校に行っているから英語も話せるよ」

「わあ、すごいんだね。ねえ、兄弟のこと聞いて」

「ミーちゃん、そのことは聞けないんだ。ティンレーには四才の弟がいたんだよ、でもね去年の七月、ひどい下痢をして一か月寝込んだまま死んでしまったんだよ。ブータンでは雨季の時水が濁ってしまい、皆下痢になってしまふんだ。そのためにまだ身体の弱い小さな子は、死んでしまうことが多いんだよ」

「下痢だなんて、薬はないの」

「あるけど少ないんだ、ドルジさんも近くのBHUっていう村の保健所に薬を貰いに行ったけど、数が限られていて、一度しか貰えなかったんだそうだよ」

ミーちゃんがお父さんと話しに夢中になっているうちに、いつのまにかティンレーがいなくなっていたと思ったら、にこにこした顔で階段をかけ上ってきて、ミーちゃんの前に両手を差し出しました。その手の平には、ミーちゃんのブローチが乗っていました。

「わあ、有り難う、お父さんこういう時なんて言うの」「カディンチュラ、って言ってごらん」

ミーちゃんが「カディンチュラ」と言うと、ティンレーは恥かしそうにブローチをミーちゃんの手に置きました。

「ブータンの人は、人のお世話をできることが、布施行としてとってもうれしいことなんだよ」

お父さんが横から言いました。

「こんなに心が温かくていい人達が、病気で簡単に死んでしまふなんてひどすぎるわ」

ミーちゃんがそう叫んだとき、ミーちゃんの目が覚めました。

「夢だったのか」目をこすりながらお父さんの書斎に行くと、お父さんはもう起きて仕事をしていました。

「お父さん、ブータンの言葉話せる？」

「話せるわけないだろう」

「やっぱり夢だ」ミーちゃんは半分寝たままつぶやきしました。

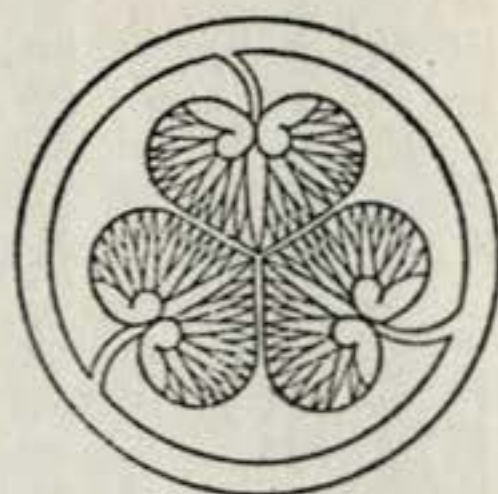
「あ、お母さんに謝らなくっちゃ、今日からは私布施行するんだ」

お父さんがびくくりして振り返りました。

江戸物語

(4)

火事は江戸の華



細田隆善

(俳号・豊明)

江戸は世界一の人口を誇ったが、江戸の建物は木造建造物のため火災の多いことも世界一、赤々と夜空を焦がす火事は「江戸の華」といわれた。ロンドンに消防隊ができたのは一六六六年、ロンドンの大火のあとである。それよりも四十年前、寛永六年（一六二九）大名に任命された奉書火消^{ほうしよひけし}という消防隊が江戸に組織された。奉書とは將軍や老中が出す命令書である。数多い江戸の火災の中で、江戸十大火災があった。

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

(1) 振袖火事^{ふりそで}（明暦三年八一六五七）一月十八日から二十日まで）——本郷丸山^{ほんやま}（文京区）本妙寺^{ほんみょうじ}から出火、丸山火事

ともいい江戸史上最大の火事（後述する）。

(2)八百屋お七の火事（天和二年／＼一六八二／＼十二月二十八日）

——駒込大円寺（豊島区）から出火。

(3)中堂火事（元禄十一年／＼一六九八／＼九月六日）——新橋

（港区）から出火、上野寛永寺根本中堂が被災したのでこの名がある。

(4)水戸様火事（元禄十六年／＼一七〇三／＼十一月二十九日）——

小石川水戸藩邸（文京区）から出火。

(5)小石川馬場火事（享保二年／＼一七一七／＼一月二十二日）——

小石川馬場武家屋敷（文京区）から出火。

(6)目黒行人坂火事（明和九年／＼一七七二／＼二月二十九日）——

目黒行人坂（目黒区）大円寺から出火、江戸史上二番目の大火。

(7)桜田火事（寛政六年／＼一七九四／＼一月十日）——麴町平川

町（千代田区）から出火。

(8)車町火事（文化三年／＼一八〇六／＼三月四日）——芝車町

（港区）から出火、牛町火事ともいう。

(9)佐久間町火事（文政十二年／＼一八二九／＼三月二十一日）——

神田佐久間町（千代田区）から出火、江戸史上三番目の大火。

(10)地震火事（安政二年／＼一八五五／＼十月二日）——安政の大
地震による大火。

江戸十大火事の中で振袖火事をご説明する。この大火により江戸の都市再開発事業が進められ、今日の大東京の原型ができあがり、消防組織が確立された。この大火の出火場所、その原因について種々の説があり、いろいろ粉飾された点もあるが、その一説。

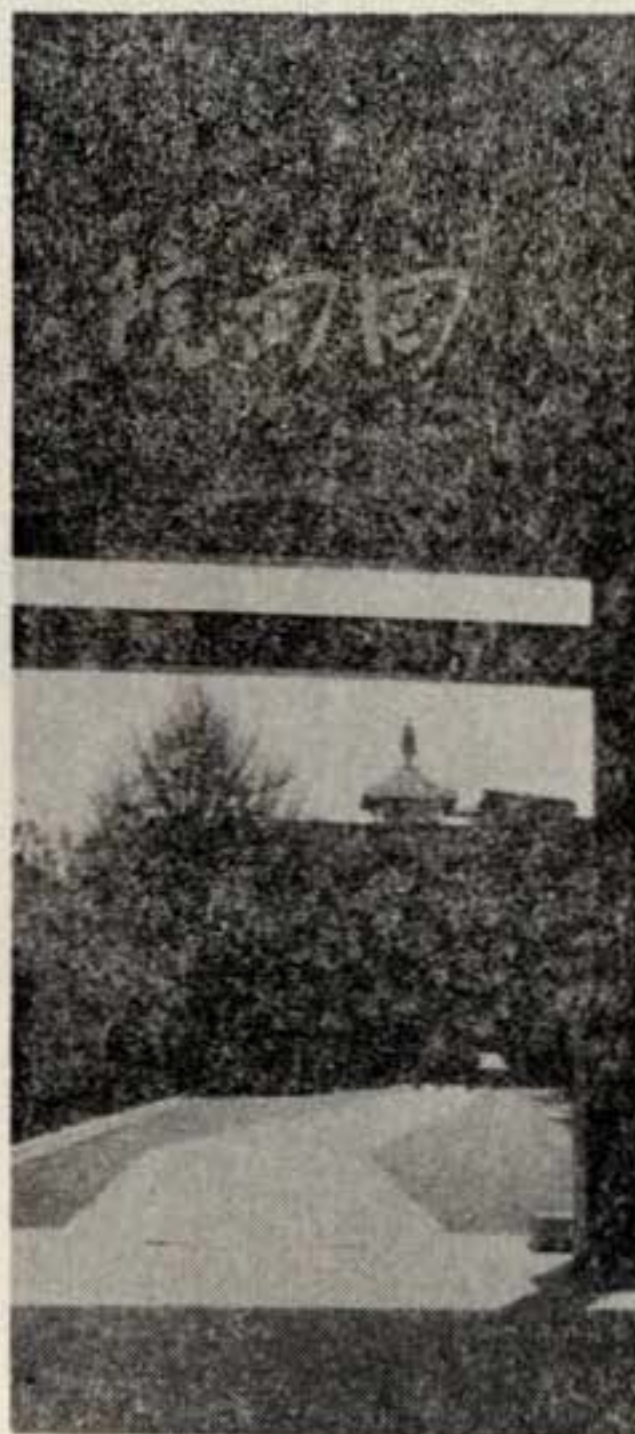
承応三年（一六五四）春三月（今の四月）麻生百姓町

（港区）の質屋遠州屋彦右衛門の一人娘である十六歳の梅野が、母親と菩提寺の本郷丸山（文京区）の日蓮宗本妙寺に参詣した。その帰り浅草観音へ参詣するつもりで回り、上野で駕籠を降り花見をしながら歩くと、寺小姓の美少年とすれ違った。江戸時代大きい寺には寺小姓がいて住職に仕え、雑用と使い役をし、武家の小姓姿をしていた。梅野はすれ違った寺小姓に一目惚れ、あとを追ったが花見の雑踏の中に消えてしまった。寺小姓の着ていたのが紫縮緬の畝織に荒磯と菊の模様を染め出し、桔梗の縫紋をおいた振袖であった。梅野は寺小姓に会えないだけにますます恋い焦がれ、親に寺小姓の着ていた同じ振袖を作らせた。布団にこの振袖を掛け、女夫遊びを操

——明暦大火の火元本妙寺跡の
揭示板（文京区）——



——回向院の明暦大火横死者供養塔——



——明暦大火横死者供養の
ために創建された回向院
（墨田区）——

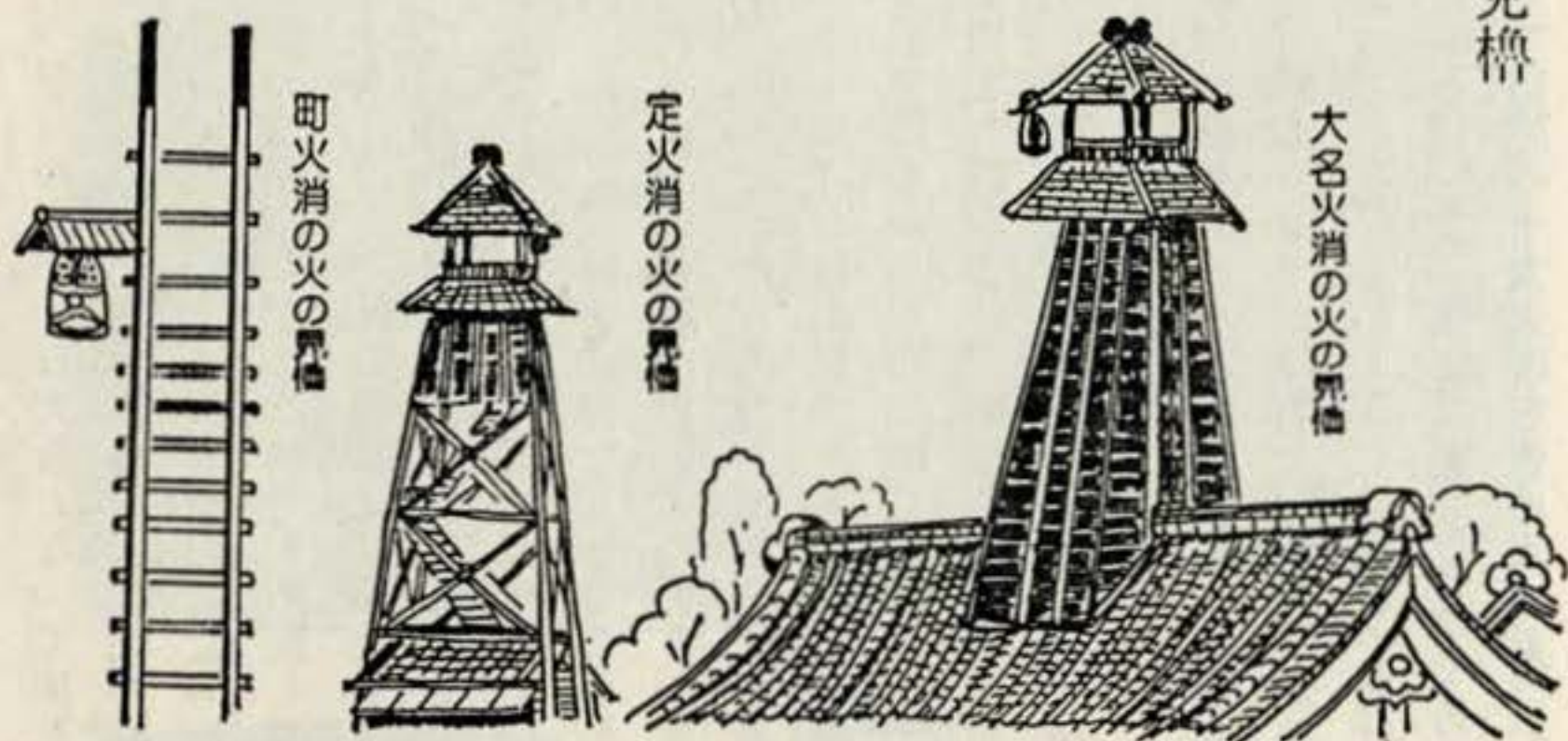
り返すようになり、遂にノイローゼとなつて、翌年の明暦元年（一六五五）一月十六日、十七歳を一期としてこの世を去つた。遠州屋では梅野のお棺にこの振袖を掛けて葬儀をすませ、この振袖を本妙寺に納めた。当時、寺では寺に納めた帯や振袖は古着屋に売る習わしであつた。

翌年明暦二年（一六五六）一月十六日、梅野の祥月命日の日に、上野山下（台東区）の紙問屋大松屋の又蔵の娘き、のが十七歳でこの世を去り、き、のが着ていた振袖をお棺に掛け、これを本妙寺に納めた。不思議にもこの振袖は梅野が着ていた振袖であつた。寺では例によつてこれを古着屋に売り払つた。ところがまた不思議なことが起きた。翌年明暦三年（一七五六）一月十六日、梅野とき、の祥月命日に本郷元町（文京区）の麴問屋喜右衛門の娘いく、が十七歳で世を去つた。お棺に振袖を掛けこれを寺に納めたが、この振袖は梅野やき、のが着ていた振袖であつた。本妙寺では梅野の寺小姓への思いがつきまといふるのではないかと気味悪くなり、三人の娘の親と相談して、一月十八日寺でこの施餓鬼会（せがきえ）を営み、本堂の裏庭で薪（まき）を井桁（いげた）に組み、その上に因縁の振袖を掛け、火を放つた。その日の午後二時のことであつた。

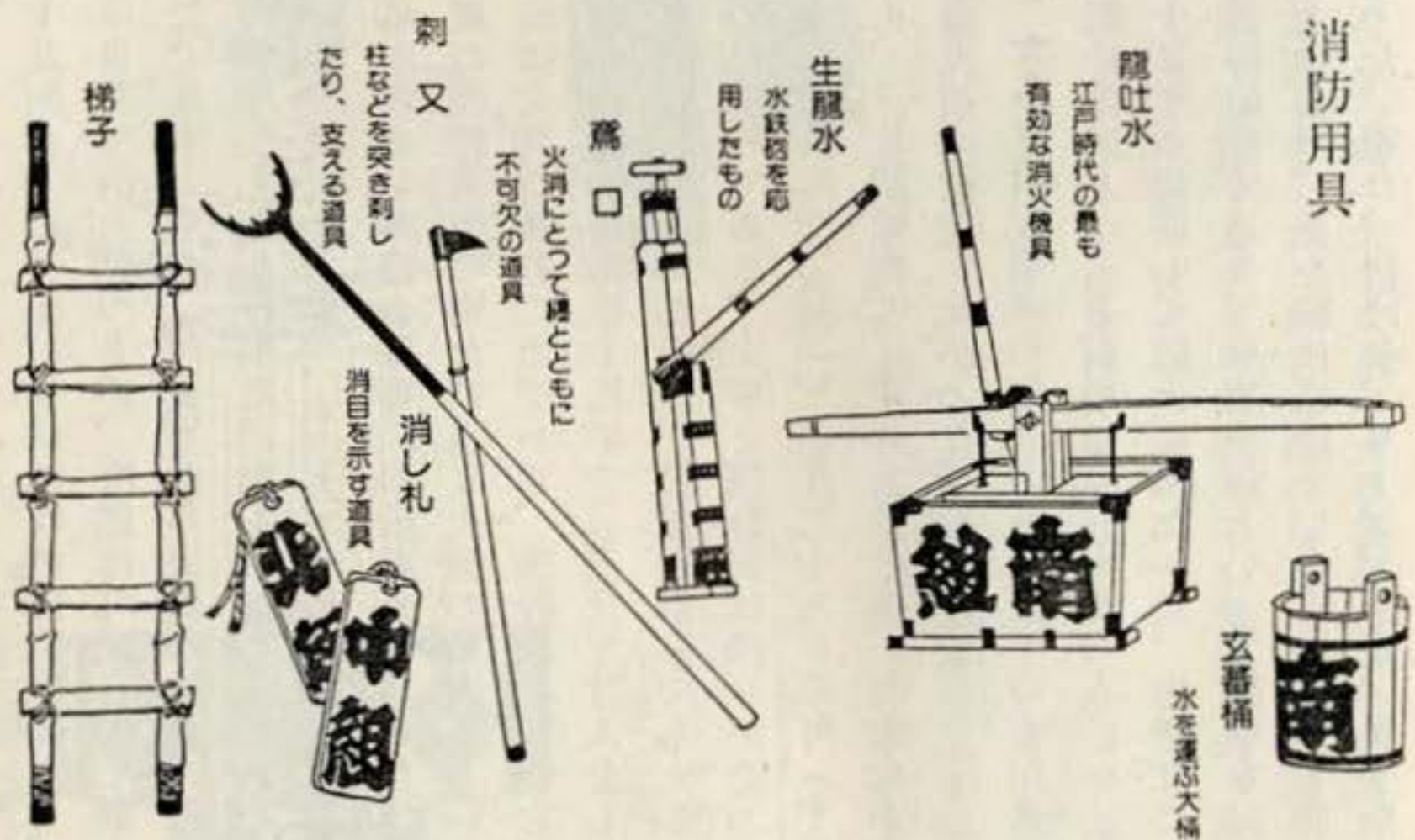
江戸ではその日まで八十日間、一滴の雨も降らなかつたので、江戸全体は乾ききつていた。振袖を焼いたときから北西の強い空っ風が吹き出し、竜巻（たつまき）となつて荒れ回つた。火のついた振袖が立ち上がり、娘の立った姿にも似て本堂真上に吹き上がり落ちたため、本堂は忽ち火焰に包まれた。火の筋は三人の娘とかかわりのある如く、三筋の紅蓮の焰となり、江戸の各町をまるで焰の蛇がのたうち回るように焼き尽くしていった。本妙寺から湯島、駿河台（以上文京区）、韃町（さやまち）、茅場町（かやばちよう）、八丁堀、鉄砲洲（てつぱうす）、靈巖島、石川島、伝馬町牢獄（以上中央区）、さらには牛島（墨田区）、深川（江東区）、へと隅田川を渡つて延焼した。翌一月十九日は伝通院前（でんつういん）、駒込（以上文京区）、丸の内に延焼し、江戸の本丸、二の丸、三の丸を焼き、諸大名上屋敷を焼き、数寄屋橋、京橋、日本橋（以上中央区）、を焼いた。同日夜から二十日にかけて麴町（千代田区）虎の門、愛宕下（あたごした）、増上寺門前、札の辻（つじ）（以上港区）を焦土と化した。

三日二晩燃え続けた振袖火事によつて焼けた町は千二百町に達し、江戸町屋の三分の二を焼いた。武家屋敷は七百七十、大名屋敷は五百、神社仏閣は三百、橋は六十一を焼き、死者は十万七千四十六人に達し、空前の大惨

火の見櫓



消防用具



事となった。その上、翌日の二十一日大雪となって凍死者まで続出した。この夥しい焼死者を集めて、現在の回向院（墨田区）のある処へ舟で運び（まだ両国橋はなかった）

六十間四方の穴を堀って埋葬し、ここに寺を創建して諸宗山無縁寺回向院と称した。のち国豊山と山号を称し増上寺末の寺となった。徳川家康が江戸を城下町にしてから六十七年目のことであつた。この火事で大空にそびえた江戸城の天守閣も延焼し、再び威容を見せることがなくなった。この大火によって幕府は再びこのような災害を防ぐため、（一）本所深川を埋め立て市街地を造成し過密化を緩和し、（二）災害を払げた材木置場を集中して木場を創設し、（三）神社仏閣を都心から周辺に移した。この大火で一万人の死者を出した靈巖寺は、靈巖島（中央区新川）から深川の現在地に移転した。四江戸の各所に防火帯の広小路を作り、（五）江戸の消防組織を確立した。この大火の九年あとに欧州最大都市ロンドンに大火があり、壊滅的な災害をもたらし、以来ロンドンには石の町となり木造を禁止して現在に至っている。しかし江戸は木造を避けるわけにはいかないから、以上の都市改造をしたのである。江戸時代を通じて前述の十大火事を含め大火災は七百

七十九回あつた。江戸初期には消防組織はなく、大名旗本は自力で消火につとめ、町屋は町民自力で消火につとめた。寛永六年（一六二九）から火災の場合、幕府は大名に非常呼出しをかけ消防活動をさせた。これを奉書火消という。寛永十六年（一六三九）から浅野内匠頭長直など六名の大名を奉書火事専門の役に当たらせた。長直は忠臣蔵の浅野長矩の甥に当り火消の名大名といわれた。町民は火消の恩恵にあずかり、浅野家に好感を寄せていた。赤穂浪士が元禄十五年（一七〇二）討入をしたとき武家火消装束であつたのは、徒党を組んでもとがめられなかったからである。火事と浅野家は縁りがあつた。

寛永十八年（一六四一）正月二十九日桶町（中央区）から出火、三日間延焼し江戸の大半を焼いた大火があつたが奉書火消は役立たなかつた。幕府は寛永二十年（一六四三）大名火消を創設した。六万石以下の十六名の大名を四組に編成し、一万石当たり三十人の人足を出し、一組が十日ずつ待期して防火に当たつた。当時はこれが唯一の消防組織であり、破壊消防といって屋根をはがし、炎を上にあげ、炎を横に広げないように延焼を防ぐ火消であつた。鳶口、掛け矢、ロープ、大鋸、梯子などを使つ



——町火消め組の喧嘩——



——芝め組の纏と絆天——

二番組

め組

芝口南
町員三十八ヶ町
人足二百三十九人

て破壊作戦を行なった。大名火消の火事装束は、映画テレビに放映されるように華麗そのもの、大名指揮のもとに消防部隊が整然と出動し、火焰の中で活躍する光景はすばらしいものであったが、振袖火事のような大火には施す術はなかった。

明暦三年（一六五七）の振袖火事の教訓によって大名火消では対応できないため、翌年万治元年（一六五八）九月八日、じょうけし定火消の制度を定めた。定火消は大名火消とは別に、幕府直属の旗本による常設の消防部隊であった。定火消は四隊に編成し、それぞれ火消役を隊長



——安政二年の地震火事——

とする。四人の隊長はいずれも四千石以上の大身の旗本である。当初四人の隊長は近藤彦九郎、内藤甚之丞、町野助右衛門、秋山十右衛門であつて、この四人は飯田町、お茶の水、麴町（以上千代田区）、左内坂（中央区）に火消屋敷を与えられた。この火消屋敷に各隊それぞれ与力六騎、同心三十人、臥煙といふ火消人足百人を常駐させた。これがわが国最初の消防屯所、すなわち消防署であつた。消防作業は一刻を争い、常に訓練し常駐させ専門職化させる必要があつた。定火消の火消屋敷が江戸城周辺近くにあつたのは、江戸城と大名上屋敷を守備するのと若年寄の命令速効のためであつた。しかしこの常火消の活動の中心は同心と臥煙であつた。

万治二年（一六五九）火消役を二組増、さらに翌年二組増、寛永二年（一六六二）二組増、元禄八年（一六九五）五組増、消防機能を十分果たすためにはしだいに常火消を増加せざるをえなかつた。火消役十五人、火消屋敷十五となり、その定員は千九百二十名に達した。しかし経費節減のため宝永元年（一七〇四）十組千二百八十名に縮少し、幕末まで定着した。そのため常火消を十人屋敷、十人火消と称した。大名火消は義務消防で経費は自分持

ち、常火消は幕府給与によるものであった。しかし安政二年（一八五五）から常火消を縮少し、慶応三年（一八六八）には一組百三十八名になった。常火消のほかには所々火消、方角火消、各自火消、などがあった。常火消の火消

役は二重鞆しころずきんの頭巾をかぶり、皮の火事羽織または毛織彩色の火事羽織を着用し馬に乗って出場、与力と同心は皮頭巾、皮羽織を着用、与力は乗馬、同心は徒歩でかけつけた。臥煙は火消屋敷の臥煙部屋という大部屋に起居して



——火事の際、土蔵の扉の隙間に味噌を塗り込め火の粉の侵入を防ぐ——

待機、気が荒く刺青を誇りとし、博奕ばくちが日常、町民に嫌われることが多く、町火消と対立することが多かった。

常火消が武士による消防隊で江戸城と武家屋敷の火消が中心であつて、町民の火事は自分たちで消せという方針であつた。ところが火事に国境はなく武家も町屋も延焼していくのである。また市街地が倍になれば、災禍は三倍、四倍に増加するという大都市行政の悩みがあつた。

このためどうしても町民サイドの消防隊が必要となつてきた。享保三年（一七一八）町奉行大岡越前守忠相ただすけが、町火消を組織した。町民自身による消防部隊を創設したのである。この組織をしだいに固め、享保十五年（一七三〇）正月、左記の通り「いろは四十八組」と本所深川の「十六組」を常備した。四十八組を大組八つに、十六組を大組三つに分けた。

老番組 い・は・に・よ・万

武番組 ろ・せ・も・す・め・百・千

三番組 み・さ・あ・ゆ・て・き・本

五番組 く・や・ま・け・ふ・江・し・こ・ゑ

六番組 な・む・う・ゐ・の・於

八番組 は・わ・加・た

九番組 れ・そ・つ・ね

拾番組 と・ち・り・ぬ・る・を

南組 一組・二組・三組・四組・六組

中組 五組・七組・九組・十組・十六組

北組 十一組・十二組・十三組・十四組・十五組

大組の四番組と七番組は死と通ずるから避け、各組のへ・ら・ひ・んの四字は避けてその代わり、万、百、千、本がおかれた。馬簾ばれんをつけた纏まとにそれぞれの組番名を記載し、その纏の形を変えて、すぐ区別のつくようにと、現在もこれを受けついでいる。町火消に活躍する火消人足は江戸全体で当時九千三百七十八名の多数にのぼり、各町の経費で処理した。各町はゴミ処理や祭り経費よりもっとも多い支出であつた。たとえば、本町一帯（中央区）を所管する老番い組組の鳶の火消人足は百八人、店人足たなは三百八十八人であつた。店人足は江戸初期から商店などが店の子や出入り職人をもつて消防につめさせたものである。また「め組」の喧嘩で有名な武番組のめ組は芝明神町一帯（港区）を所管し人足は二百三十九人もいて江戸最大の町火消であつた。深川木場の南組一組は火消人足十人であつた。

町火消は当初、常火消の足手まといであったが、しだいに消防力を高め、宝暦以降（一七五二—）は常火消を圧倒し、幕末に至っては常火消は衰え町火消が中心となつて江戸の火災は対処してきた。明治時代になって町火消だけが残り消防組となり、現在の消防団となった。泰平が続き甲冑姿の隊列の見られなくなった江戸時代、常火消と町火消が火事装束に身を固め、颯爽と馬上から指揮をとり、隊伍堂々と火事場へ駆けつけ、火の粉をはらつ



— 深川の南組一組の纏馬簾 —

纏と半天

南組一組



て夜空を焦す火焰と戦い、馬簾を振りかざす光景は江戸の壮烈な華の絵巻であった。

齒切れよき江戸っ子弁を倦立つ

老いたる鳶は馬簾を語る

豊明

付記——三葉葵のカット

このカットの三葉葵の定紋は、徳川家康が慶長八年（一六〇三）將軍に任命されてからの家康の定紋である。以来三葉葵の定紋は、歴代將軍及び徳川松平一族の家紋となったがその形は少しずつ異なる。

（つづく）

木

下

隆

一

随

筆

集

2

海と山の狭間で

—金をかけない小さな旅—

木の^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

画家の赤瀬川原平氏（この人は作家でもあり、尾辻克彦の筆名で、五年前「父が消えた」で芥川賞を受賞している）を中心に、五、六人の仲間が集まって、「路上観察学」なるものを確立しようとしている——と言えば大袈裟だが、要するに限られた一区画、例えば文京区なら文京区を参加者の数で割って地図上に線を引き、決められた分担区域内の路上を数日間かけて徹底的に歩き、心に留まった物をカメラに収めたりメモしたりして、夜、それを合宿所

に当てられお旅館に持ち帰って検討し、何らかの意味づけや位置づけをしようとしているのである。この「路上観察学会」(仮にそう名付けておく)がユニークなのは、それが全くの遊びであって、地域社会への貢献度が皆無である事と、一つの物に固執せず、目に触れる物すべてを観察の対象物件として捕え、それらを旅人(一通行人)の目で観察するところにある。地域の住人には取るに足りない物や、出来れば隠蔽してしまいたい物件が、旅人の目には珍奇な物に見えたり、想像力を掻て立てる物であったりするから、そこに意義を見出そうとしているのである。例えそれが独断と偏見に充ち満ちていようが、新たな発見は往々にして、そんな旅人の目から生まれると信じて、彼等は活動しているのである。

何だ、彼等は俺と同じ事を集団でやっているだけではないか、と私は思う。しかし、そう思いつつも、合宿までして検討し合うという姿勢が、私は羨ましい。中年の男が寄り集まって、盃片手に愚にもつかぬ事に血道をあげている図は、当人達が大真面目であればある程、傍目には滑稽極まりなく映るだろうが、共通の目的を持った仲間がいない私には、それが限りなく羨ましい事に思えてくるのである。生来私は好奇心が旺盛で、何でも見てやろうという野次馬的精神は人一倍持っているが、飽きっぽいというか、ある程度のところまでくると、もういいやと投げてしまう。とことん突きつめて考える性格であつたら、ある種の分野で一流とまではいかぬまでも、二流の学者の列に名前ぐらいは連ねていたかも知れないが、別段それを悔いている訳ではない。人にはそれぞれ分相応の持って生まれた器量があり、それを超える事は出来ないからである。超えれば当然破綻を生じる。俺の

器量はこのくらいと見極めて、背のびしない事だと悟ったのは幾つの時であったか、かなり若い頃に私は自分の器量に見切りをつけていたように思う。知人の中にも、不慮の死を遂げた者や、自ら命を絶った者は二、三に留まらないが、彼等の死を思う時、どこか背のびをして生きていたような気がしてならない。もう少し気楽に生きる事は出来なかったのかと、残された家族の事を思うと、いつも私はやり場のない悲しみを覚える。どうせここまで生きてきたのだから、生きられる間は生きて、そして朽ち果てるような死に方をしたいものだと思ふ。贅沢三昧の生き方をしてきた訳じゃなし、せめて死ぬ時ぐらいは、そのくらいの我がままは許して欲しいものである。

旅の歌人西行は、

願はくば花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月の頃

と、釈迦入寂の頃死にたいと詠ったが、願い通り、建久元年（一一九〇）二月十六日、七十三歳で大往生を遂げている。願わくばかくありたいと思うが、死の日時を決めかねている私には、先ず無理な話である。

「路上観察学」が無駄を寄せ集める小さな旅なら、生きる事も小さな旅で、無駄な日数の積み重ねではと思っているうちに、あらぬ方に話がそれてしまったが、ニューメディアのテレビが、紀行という分野に踏み込んだのは、いまは無くなってしまったが、NHKの「新日本紀行」があったかと思う。富田勲のテーマ曲と共に、忘れ難い番組の一つである。

民放では日本テレビ系列の長寿番組「遠くへ行きたい」であろうか、テレビのカラー化が進み、海外の取材番組も増えて、居ながらにして世界の風物をそっくりそのまま目にする事が出来るのは有難いが、注文がない訳ではない。かつての「新日本紀行」や「遠くへ行きたい」が正統派とすれば、雨後の筍のように現れては消える、亜流の秘湯めぐりや食べ歩き番組は同工異曲で、一事が万事作り物とは言わないが、いわゆるヤラセが見え見えの場合が多い。「たまたま村の祭に出会いました」などというコメントが入ると、「嘘つけ、祭を当て込んで取材に行ったくせに」と毒づきたくなるし、「何で山奥の露天風呂で、美人でもない女のレポーターが湯につからなきゃならないんだ、猿でも泳がしておけ」と、ブツブツ言いながら見ていると、「その方が余程のヤラセじゃないの。そんなにうまい具合に猿がいる訳ないじゃない。嫌なら見なければいいのに」と娘は笑うが、露天風呂を取り巻く周囲の景色に心引かれて、ついつい最後まで見てしまう。自然だけは決して人を裏切らないからである。山の幸を満載した食卓に侍った鄙、マレの女将が、しどろもどろに料理の説明をしたりしていると、「この料理、宿代に含まれているのかな」と考えてしまうし、ヤラセが過ぎると、「この人本当にここの女将なのかな」と疑ってしまう。ヤラセについて文句を言えば切りがないが、粗探しをしながら見ていると結構楽しめるのである。しかしこの種の番組でも、見る側の心がけ次第では、一つや二つは心に留めておきたい情報が得られるものである。紀行番組のレポーターとしては、私は「遠くへ行きたい」の渡辺文雄を買っている。以前この番組には企画者の一人でもあった永六輔という優れた

レポーターがいたが、国鉄の分割民営化反対の意見広告に名を連ねたばかりに、スポンサーであった国鉄の忌諱に触れて、番組をおろされてしまった。多少饒舌に過ぎる嫌いは無きにしても非ずであったが、構成・演出・出演の一人三役をこなしていた才能は非凡で、消してしまふのはいかにも惜しい気がする。永六輔に比べると、渡辺文雄は構成者の意に添って動いているように見えるが、言うべき事は自分の言葉で的確に伝えていくから説得力がある。やはり年の功であろうか。とにかく安心して見ていられるのである。この他、現在放映されている物では、NHKの「関東甲信越小さな旅」というのが、私は好きである。男女のアナウサーが交替で、関東甲信越の町や村（時には伊豆まで足を伸ばす事もあるが）を歩くという極くシンプルな物であるが、気負いがなく、妙な細工をしないところがいい。再放送を見てやろうという気を起こさせる程、映像が美しい。スタッフに詩心を持つ人が集まっているのに違いない。お金をかけなくても番組は出来る、という見本のような番組である。

居ながらにして旅を楽しむには、古今の紀行文に親しむもよし、旅のガイドブックを開いて、あれこれ想像をふくらませるのもいいだろう。私の友達に風変わりなのがいて、地図と列車の時刻表だけで日本全国をさすらって悦に入っているが、私はいまのところ専らテレビの紀行番組で、内外の旅を楽しんでいる。カラーテレビのおかげで、旅は一層楽しくなった。

テレビを見て、俳句を作る事を覚えたのも、カラーテレビが入ってからであった。我が

家に初めてカラーテレビが来た日の事を、私はいまでも鮮明に思い出す事が出来る。夜遅く勤めから戻ってスイッチを入れると、足摺岬の秋の景色が私の目に飛び込んで来た。未知の土地であったが、色付きの画面はとても初めて見る景色とは思えなかった。常々描いていた足摺岬の心象風景に、あまりに似通っていたからである。空の碧さも、白い花の穂も、黒味を帯びて押し寄せる浪の色も、実物以上の迫力で私に迫って来た。モノクロームのテレビでは味わえなかった色彩の瑞々しさに、私は酔った。そして、実に久し振りに、十何年振りかで、私は無意識に手許の紙片に句を認めていた。

風濤の岬に暑し秋の風

以来、私は俳句を作るのに、時々テレビの紀行番組を利用させてもらっている。紀行番組だけでなく。ニュースのスナップも、「日本列島朝いちばん」といった早朝番組も、私に俳句の材料を提供してくれるから有難い。殆どがNHKの番組なのは、民放の番組はレポーター（アナウンサーもタレントも）が顕示欲まるだしで、必要以上に甲高い早口で喋るから、興を殺がれてしまうのである。ともあれ、私の心の引出しには、日本各地の四季の風景がいっぱい詰っている。引出しの中味はこれからも増え続けて、居ながらの旅をより充実したものにしてくれるに違いない。



さて、夜来の雨も上ったようだ。煙草も切れた事だし、煙草屋まで五分の道のりを、路上観察の小さな旅に出かけるとしよう。

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

いかなかったであろう。

「この国の言葉で呼ぶからこそ天子、貴人高官、方士、庶人賤民などと差別が生じてきます。天竺の王はこの国の天子ではありません。吐蕃の貴人は、突厥の高官は、此処では通用致しません。つまり異国語の阿弥陀仏は如何なる国土地域でも平等でいらっしゃるということです」

「そういう理屈か」

善導の説得が厭勝師に通じていったかどうか。

「要するに阿弥陀仏は広く人間世界のホトケであり、いやこのホトケは人間そのものでいらっしゃるということです」

善導が「阿弥陀経」を書写しては、陋巷の善男善女にこれを配布した。その意図は阿弥陀仏なる異国語の呼称を一人でも多くの人間に普及したかったからである。そして称名念仏、みんなで南無阿弥陀仏と唱えることで、この人間社会の団結と安寧至福を獲り取りた

かった。

千三百余年も昔に生きた善導に、近代的論理を期待するのは酷である。だが現存する彼の遺書から阿弥陀仏を広く人間世界の救済仏としてとらえようとする意図だけはうかがえる。

その「著観念法門」で善導は、五種増上縁を説いている。阿弥陀仏の深い慈悲によって与えられる五種類の利益(りやく)である。その内容は「滅罪」「護念得長命」「見仏」「撰生」「証生」の五つの功德である。

阿弥陀仏の御名を唱えることで、あらゆる罪は消えて(滅罪)、長生きができて(護念得長命)、仏にめぐり遇えて(見仏)、生活は平和で(撰生)、立派な往生が遂げられる証かしを得る(証生)、という利益が与えられるのである。

この内容は「現世利益」と軽く受けとめられがちである。だが念仏を、とかく死(肯定)のためだけのものに局限しがちな偏狭な考え

かたに修正を加えている事実を見逃してはならない。

そこには現実を肯定し（するからこそ護念得長命や摂生が発想されている）人間相互が信頼し合う思想が脈々と息吹いている。

善導の他力念仏の軸芯にこの現実肯定があったからこそ隠遁者とはならず、積極的に街頭へ進出したのである。

これまでの念仏者はともすると深山幽谷へ隠遁する境涯をえらんだ。慧遠は廬山へ籠もりきっていたし、道綽も石壁山から出ようとはしなかった。その意味では自力的な修法と言われても致し方があるまい。その教学や信仰は純粹だったであろうが、庶民大衆との接点は稀薄であった。

「五種増上縁」にみる善導を「浄土教理の本義から外ずれ、世俗と妥協した」と批判する末学もいるが、これはあくまでも近代という視座で見ようとするのであって、朝晩の挨拶に「阿弥陀仏」と大衆に言わせた浸透力の根

源を思い忘れてはならない。

わが法然は「偏エニ善導ニ依ル」と公言し、善導念仏の忠実な継承を誓ったのである。その核心を「選択本願念仏集」で明示している。

——故知念仏易故通ニ於一切ニ諸行難故不レ通ニ諸機ニ然則為レ令ニ一切衆生平等往生ニ捨レ難取ニ易以為レ本願ニ歟。

念仏は誰にでも出来る易行だが、他の修行方法は難しく、万人の能力に対応することが出来ない。ゆえにすべての衆生を平等に往生させるためには、こうした「難行」を捨てて、やさしい方法（称名念仏）を取って本願とされたのであろうか。

——（承前）若夫以ニ造像起塔ニ而為ニ本願ニ則貧窮因乏之類、定絶ニ往生望ニ然富貴者少、貧賤者甚多。若以ニ智慧高才ニ而

為ニ本願ニ則愚鈍下智者定絶ニ往生望ニ然智
慧者少、愚癡者甚多。

堂塔を造ったり仏像を刻むことを本願としたならば、貧しく賤しい者たちは往生する望みが絶たれてしまう。しかし裕福な者は少いのには貧しく賤しい者は甚だ多い。また智慧や本能のすぐれた者を本願の対象とすれば、愚かで無知な者は往生する望みを絶たれる。だが（この世には）智慧ある者は少く、愚かな者が満ち満ちている。

阿弥陀仏の御名を唱えるだけという容易な修法を選んだ目的は、貧しく智慧もとぼしい最下層の大衆を平等に救おうと誓われたからである。仏教の始祖である釈迦如来はそのために浄土思想、阿弥陀仏の信仰をお説きなされたのだ、と「選択本願念仏集」も言いきっている。

十一

「善導和上」

厭勝師の明崇儼は口調をあらため、きびしい視線を寄越してきた。

「何でしょうか」

「わしら方士が信奉しておる無量寿仏なる天神と会ってみたいとは思わないか」

「無量寿仏がどこかに實在されているのですか」

「實在しておる」

「この石巖に刻まれた無量寿仏でしょうか」

「違う。石仏や金人ではない。立派に血のかよった無量寿仏ですよ」

きっぱりと言う。

「是非お目にかかりたいものです」

「では、ついて来なさい」

歩きだした厭勝師はじろり少年憚良をかえ

りみた。ついてくるな、と強い語気で言った。

「なぜ駄目なのですか」

「お前は未だ修行が足りていない。聖なる無量寿仏にお会いする資格がない。いや、お会いしてもお前には判別がかなわぬであろう。

善導和上のようにしっかりと修法を積まれたお方だけがそのお姿をごらんになれる」

にべもなく突き放された。善導は何も言わなかった。

明崇儼は先に立つと、工事中の第十九洞（奉先寺洞）からさらに南へ進んだ第二十二洞（王祥洞）と次の火焼洞との間にある狭い山道を登りはじめた。

山道とは言っても「人跡」が印された登頂路ではない。降雨時に山頂からの雨水が流れ落ちる水路であった。当然ながら足もとは不安定で登ってゆくのも容易ではなかった。高齢の善導は息が詰まりそうになる。

同行を拒否された憚良は山の端に消えた二

人を見送ったが、俄かに不吉な予感がおおいかぶさってきた。あの厭勝師は何を企らんでいるのだろうか。

憚良は小走りに王祥洞、火焼洞の前を駆け抜けた。たしかその先に、ちゃんとした登頂路があるはずだった。そこを避けて、道なき道を往こうとするとところが怪しい。

正規の登頂路だと簡単に山頂へ達することができた。全山が石巖質なので山頂も石塊がごろごろしている。憚良は巨岩を選ぶと、そのかげにしゃがみこんだ。

未だ兩人とも登ってきてはいなかった。登りきれないはずだった。やっところさ石塊の水床を登りおえると、頭上に巨岩が顎のようにさえぎっていた。足がかりはどこにも見あたらなかった。

「これを越えないことには無量寿仏とお目にかかるわけにはまいらない」

山で鍛えた厭勝師はもの馴れた容子で、あたりの石塊をかき集めはじめた。それを積み

あげてゆくのである。

「あなたがたの無量寿仏さまは、ずいぶん難儀な場所にいらっしゃるのですね」

善導はしゃがみこんで乱れた息を調えている。

「容易に会える神や仏、それは贖物だ。わしら人間が艱難辛苦、修行に修行をかさねて、ようやくお会い出来るのです」

「誰の前にも現れて下さるミホトケが、道教の手に染まるとそれほど難かしいお方になってしまわれるのですかねえ」

善導には珍らしく軽い皮肉がこめられていた。

石塊を腰の高さぐらいに積みあげると、明方士はひらりとその上に跳び乗った。片足で立つと頭上の岩顎へ手を伸ばした。そこにすがりつける割れ目でもあったのであろう。

次の瞬間、厭勝師の身体は虚空にぶらさがった。足もとの石塊は音をたてて崩れ散ってしまった。

岩顎の割れ目にかけた両の指先だけを頼りにして明方士は二度、三度と身体を振った。振り子の反動で、足先から岩顎の肌へ跳びついた。見事な回転である。明方士の全身が岩肌へ蜘蛛のように貼りついた。

未だ頭部が下方を向く逆の体形だった。手足の指先に渾身の力を注ぎながら、厭勝師はその体形を少しづつ修正してゆく。

道教の霊場泰山に籠もって永年にわたり鍛えこんだ手練の「仙道捨身」である。身を捨てて神仙への道を追求してゆく修法の成果だった。

泰山の峻嶒は山頂の碧霞宮を東山から囲むようにしてそびえる日観峰と月観峰にある。そこから切りおろされた断崖は目くらむばかりで、その岩肌をよじ登るのが方士たちのだいたいな修法であった。ひとつ手を滑らせれば、奈落の峡谷へ逆落しになってしまう。それだけに狭い天空をふり仰ぎつつ岩肌を爪で搔いて登る難路は、方士たちにとって神仙

☆☆

手

練



の国へ達する天路歷程だったにちがいない。

ちなみに泰山の無量寿仏堂は前頂ともいえる岱廟のすぐ西側にあった。煉魔堂、靈応宮、真君廟などと群立していた。

竜門石窟の上壁を目ざして巨岩に寄りついて竜獸勝師の身体は完全に頭部を上方へ持つてゆく体形になった。ぶらさがっていた身が巨岩に跨がる姿勢に変わったのである。

「和上、登ってこれますか」

征服を一つやりおえた明方士は余裕のある声をかけてきた。

「それは無理であろう」

「いま綱を投げますから、それに掴まって登って来られよ」

胴間声が頭上で響いた。

綱とは言ってもツタカズラを編んだものが、するすると岩肌を滑って善導の額の前へおりてきた。いつのまに、こんな用具を準備したのだろうか。石塊の川床を登ってくるときは見かけなかった品物である。

その秘密は、すでに頂上に到達していた少年憚良によって覗き見されていたのである。ただし、事態の全景を見渡すわけにはいかなかった。

憚良は頂上台地へ到達すると、そこにまだ善導たちが来ていないのを確認してから第二十二、三洞あたりと見当をつけた地点さして戻りはじめた。

目ざす地点には石棺のような巨岩が横たわっていた。尖端は伊川の方へ突出していて、恰好な眺望台になっていた。憚良は近づきかけて足を停めた。そのまま手近の岩かげへ身をかくした。石棺のへりに手先が二本見えてきたからである。十本の指に渾身の力がこもり、全身を石棺上へ押しあげようとしている。

位置を移動して石棺の向う側を覗くと、ぽっかりと堅穴があいており、石棺の下半身が絶壁となって奈落へかけて切り通されているのだった。

十本の指が、ほどなく頭部、胴体、両足をそろえた人体となった。まぎれもなく厭勝師の明崇儼であった。

石棺上へ這いあがってくると、そのまま坐りこんだ。乱れた心気や緊肉の硬直を調えようとしているにちがいない。

明方士は、足を組んだ股間へ右、腰の背部へ左こぶしをあてがって瞑目した。これは道教独自の行気法で「胎息」と呼ばれている。

わが身を母胎内の胎児に見立てて、鼻や口の呼吸を避け、全身の皮膚呼吸にゆだねる。すると疲労で濁った血液が代謝して新たな「用気」がみなぎってくるのである。

握りしめたこぶし。道教の術語では「握固守一」という。握固は、胎児そのままに拇指を四本の指でくるんで握りしめるのであり、守一はその胎児が棲む世界へ行気を集中させることであった。いま明方士がこぶしをあてがっている股間と腰の背部は「絳宮金闕」——つまり子宮と男根である。

この「胎息法」は熟達の方士にのみ適用が許される。いま明方士は岩盤上で激しく動きまわった疲労を一気に挽回しようと胎息に集中している。

長い時間を要さなかった。明方士は体気を調えると立ちあがり、石棺上を尖端のほうへ歩きだした。そこに小さな石造りの巫祠が安置してあった。道教の神を祀ってあるのだから。

明方士は巫祠の中から何やら草束を引きずりだした。憚良の眼にもそれがツタカズラをつないだものであることがわかった。

厭勝師が善導の面前へ「綱」と称して投げおろしたのが、この頼りないツタカズラであった。

「さあ早く、和上よ、これにつたって登ってこられよ」

石棺の下半身がこしらえた切り立つ堅穴の底へ向って、明方士は叫んでいる。

お師僧さま、やめて下さい。そのまま引き

返して下さい。そんなものを掴んだら命を失います。

少年憚良は声にならない叫びを胸のうちへまき散らして祈るしかなかった。

だが、善導が危険きわまりない登頂動作へはいったことがわかった。ツタカズラを握って堅穴を覗きこむ厭勝師の眼に、残忍な殺気がさしこんできた。

十二

善導のたおやかな容姿が石棺上へ現れた。

厭勝師は逞しい腕をさしのべて岩壁をよじ登ってくる最後のステップを助けて引きずりあげた。

憚良が恐れていた殺意を、明方士は最後まで行使しなかった。握っていたツタカズラの手もとを放下するだけで善導は奈落の底へ逆落しになっていたことであらう。

「和上よ、よくぞやり遂げられました。ひとかどの方士、道士でも出来ない登攀行ですぞ」

と石棺上にうづくまり、全身で吐息を刻んでいる善導を褒めそやした。

現代の登山用語にしたがえばロック・クライミングである。それも命綱は怪しげなツタカズラを綱い合わせたものであった。

だが、苦しい息のもとで善導は喘ぎながらも言った。

「あなたがたの無量寿仏は、どこにいらっしゃるのですか」

「無量寿仏か」

「早くお目にかからせて下さい」

「和上は、その一念だけで登って来られましたな」

「ほかに何がありましたでしょうか」

六十歳をこえた老軀に課した危険な旅——たしかに道教が信奉する無量寿仏の実像に触れ合いたいという望み以外に何があるだろう

か。

「うむ。和上の信心は、いかなる道士、方士よりも凄さまじい。さあ、こちらへ来られるがよい」

石棺の尖端さして歩きだし、石造りの巫祠の前に膝まずいた。

少年憚良は、もう良かろうと判断し、二人の前へ姿を現した。

「どこから来た？」

「この先の山道を登ってまいりました」

「なかなかすばしい奴」

厭勝師は複雑な笑みをえがいた。この小坊主は、自分を見張っているのか。

だが、いまの明方士は豊かな気分にあつて、いさよであった。いったん善導へ向けた殺意をどうにか抑制して、純粋な宗教者同士として立ち向っていられるからであろう。

巫祠に祀つてある無量寿仏は形あるものではなかった。木片に梵字を書きつらね、それをはめこんだだけであつた。皮肉にもその梵

字は、

「阿弥陀仏としたためてあるではありませんか」

善導は合掌、礼拝したあと、淡々と言つた。

「これが阿弥陀仏か」

「そうです。この文字をわが国の言葉に訳し直すと無量寿仏となるのです」

「うむ……しかし善導和上よ。わしが和上に無量寿仏に逢わせてやる、と申したことは嘘ではないぞ」

「わかつております」

「なにッ、わかつておるとな」

「はい」

「いづどこで、どんな無量寿仏に」

「明方士よ。それはあなたご自身です」

「わし自身か」

なぜか厭勝師はそのとき、にんまりと笑つた。

「あなたはさきほど、草綱を投げ与へた

き、わたしを殺そうと考えた。草綱の手もとを離すだけで、わたしはひとたまりもなかった。また、ようやく頂上へたどりついたときでもあなたが、わたしの面上を蹴りつけさえすれば、数丈の底へ転落していたでしょう。わたしはそのまま死ぬ。死ぬ直前に、ちらりと無量寿仏のお姿を見かける。明方士よ、あなたが逢わせてやると言った無量寿仏とは、そのお姿だったはずですよ」

「うむ……そこまで知っていて和上よ、なぜあの草綱を掴んだのか」

「わかりません。ただ一つだけ言えることは、どんなかたちにせよ、阿弥陀さまにお目にかかれればそれで有難い、ということですよ」

「わからんなあ。和上のその考えかたが、わたしにはわからない」

「それは明方士が、信心の何たるかをご存じないからです」

「信心する者は死をも恐れないか」

「恐れるとか悦ぶということではありませぬ。ことに阿弥陀仏にすべてをゆだねる浄土の信仰は、まず信ずるということからはじめるのです」

「まず信ずる？」

「阿弥陀仏を絶対に信じているからこそ、明方士よ、わたしはあなたを信じました」

「おぬしを殺そうと企んでいるこのわたしを」

「殺すとか殺さぬとかは、わたしども人間の問題であって、阿弥陀仏には関係がございません。そのお慈悲を信じていれば、極悪人の前にでも心安らかに立ちはだかるでしょう」

「わたしは極悪人か」

「いいえ、明方士は極悪人ではありませんでした。草綱を優さしく操ってわたしを頂上まで導いて下さいました」

「なぜ、あのように変心したのか、自分でもわからない」

「やはり阿弥陀さまの慈悲ですよ。だからそ

の慈悲を信ずる浄土の信者は、人間のすべてを信ずるということになります」

「人間のすべてをな。すると、道教のように悪人を忌避して善人だけに接してゆこうとする考えは間違っていることになるな」

「間違いとは申しませんが、そんな世の中は成立しません。悪人だからといって信用しない。つまり人間が同じ人間を信用しないで、何ができますか。くり返すようですが、阿弥陀仏がすべての人間を救って下さるという慈悲深いホトケだと信じられれば、どんな人間でも信じる事が出来るはずです」

理念、理論ではなかった。なまなましい体験にもとづいている。それも当面した相手が眼前に立っているのだ。善導の言葉には迫力があつた。誰よりも明崇儼の胸底へ深く喰いこんできた。

「善導和上よ。わしは阿弥陀仏を研究してみたい」

「それは嬉しいことです。どうぞこだわるこ

となく浄土の教えを学んで下さい」

「誰について教えを請うたら、よろしいかな」

「さよう……ここにゐる憚良で充分でしょう」

善導は少年を指さした。憚良はどきりとなつた。明方士は不服げである。

「こんな小坊主で大丈夫かな」

「浄土の教えは誰にでも理解できる容易な教理です。この憚良は基本をしっかり身につけているから間違いはございません」

「では、そういうことにするかな」

道教の理念や方術で凝り固たまつた明崇儼の頑な心を、阿弥陀仏へ向けて開くことが可能かどうか。憚良にはすこぶる不安であつた。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年 四月二十五日 印刷

昭和六十二年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

住職待望の回向文集ができました

新 諷 誦 撰

編集 白金ブディストクラブ

監修 竹中信常 大室了皓 山本康彦

装丁 豪華クロス張り コンパクトサイズ

(タテ 十九・三センチ ヨコ 八・二センチ)

内容 諷誦文 十編 下炬文 二編

定価 二〇〇〇円 (送料別)

(申し込み先)

〒一四一 東京都品川区上大崎一―九―二

戒法寺内 白金ブディストクラブ

TEL 〇三(四四二)八九七二

FAX 〇三(四四二)八七〇二



第五十三巻 五月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行

昭和六十二年四月二十五日印刷 昭和六十二年五月一日発行